私の夢

感謝で成り立つ仕事

関東柔道整復専門学校
3年　小田　敏明

「申し訳ないけど今月で……」、前の職場での社長からの一言です。会社の倒産と共に、このままでは駄目だ……職種を変えよう！　と決心し、数ある職業の中から柔道整復師を選びました。今からちょうど3年前の話です。

当時、仕事を選ぶ上で重要視したことが何点かあります。

① 仕事として社会に必要とされていること
② 自分の理想とするライフスタイルを実現するための手段となること
③ お互いの感謝の基に成立していること

柔道整復師という職業を知った時、これらのピースが綺麗にはまったような気がしました。そして、今までに無い魅力とやりがいを感じたのを覚えています。

研修先も決まり、現在では患者さんの「ありがとう」にいつも励まされ勇気付けられ続けています。この仕事を選んで良かったなと日々実感していますし、やっぱり私は人が好きなのだと思います。人が好きだからこそ、少しでも苦しんでいる人と共に助け合いながら生きて行きたいと思えるのではないかと感じています。

果てしなく長く思えた学生生活も残り5カ月、もうすぐ国家試験です。今は資格を取り、柔道整復師になることを最重要に考えて生活しています。しかし、もっと重要なのは資格を取った後に何をするかです。目先のことで長期的な目標を忘れないよう、立ち止まることなく日々邁進して行きたいと思います。

これからは有資格者も増え、決して楽に成り立つ仕事ではないのかも知れません。しかし努力を怠らず学び経験することで、心を豊かにしてくれる素晴らしい職業だと確信しています。患部の痛みはもちろん、心の痛みも和らげることのできる人、感謝の心を忘れずそれを与えられる人間を目標に努力し続けます。

ここに辿り着くまでに支えてくれた家族。落ち込んでいた私を励ましてくれた友人。何も知らなかった私を拾ってくれた研修先の先生。患者さんや学校関係の皆様。様々な方に「ありがとう」。

私の夢

慕われる柔道整復師に

専門学校 浜松医療学院
2年 伊藤 真理

看護師である母を見て育った私は、小さい頃から何か人の役に立つことがしたいと思っていました。その何かを見つけるまでに随分遠回りをしてしまったようにも思います。健康に関するセミナーに参加したり、民間団体の資格を取得してきましたが、更に深い知識を求め柔道整復科に入りました。30代なかば過ぎのスタートです。

現在、私は3人の娘を1人で育てながら学校に通っています。勉強・仕事・家事・育児の他、趣味で始めたトライアスロンのトレーニングと毎日があっという間に過ぎていきます。子供達の朝食を作った後、毎朝1時間のトレーニング。家事を済ませ学校へ向かい、学校が終われば夜まで仕事。帰ってすぐ家事、2時間の夜のトレーニングへと続きます。

さて、勉強はいつしているのだろうと思うでしょうが、電車での移動時間などスキマ時間をフル活用しています。5分と無駄な時間が無いような状態ですが、毎日が充実し、健康でいられるのも、スポーツをしながら規則正しい生活を送っているからでしょう。施術する側が健康であることは大切なことだと思っています。

3人の娘達は理解があり、私のことを応援してくれています。娘達に対しては、言葉だけで教育するのではなく、私自身の生き方で伝えていきたいと思っています。

これは、仕事に対しても同様で、私生活であっても正しいことをしていなければ、いくら高い知識や技術を持っていても認められないでしょう。不正や不祥事の多い世の中、医療の現場で患者さんと向き合うためには、秩序ある行動が必要だと思っています。

現在の健康ブームに加え、高齢化社会が進む中、人々はどのようなものを求めているのかを患者側の立場になって考えていきたいです。男性の柔道整復師が多い中、女である私にできることがあるはずです。

そして、医療の世界は、学習することに終わりはないと私は思っています。今、持っている知識に固執することなく、資格を取得した後も、日々勉強だと思っています。

今までの経験を生かし、単に損傷部位の施術のみにとどまらず「元気」や「笑顔」を与えられ、地域の人々に慕われるような柔道整復師になりたいと思っています。そして私自身も走り続けたいです。

私の夢

温かみのある家庭と接骨院を開業して、人の役に立ちたい

仙台接骨医療専門学校
柔道整復科3年
伊藤　裕

私には二つの夢がある。

一つは温かい家庭を作ること、もう一つは接骨院を開業して人の役に立ち生活をしていくことだ。

この二つの夢に共通する私の思いは「温かみのある家庭、接骨院を作る」ことである。

極端な話、何も考えずにただ家庭を作るだけならば簡単にできてしまうだろう。しかし、実際には経済的な問題、社会的な問題、そして性格や愛情など、温かみのある家庭を作るには様々な問題がある。

当然のことながら最低限の収入がなければ生活していくことができないし、家族や友人に認めてもらえない関係では、わだかまりが残り続け、心に荷物を背負ったままでいることになる。まして、性格の不一致では一緒にいることなどできないし、愛情がなければ共同生活を送るのが非常に困難だ。

接骨院を開業して生活を維持することもこれに似ているように思える。柔道整復師として知識と技術、人格を認められなければ患者さんは来院してくれない。来院してくれなければ収入はなく、生活は維持できない。

では、それらの問題をクリアするにはどうしたらよいだろうか。それを考えると一つの結論に至る。それは至極当然のことなのだが、自分自身が努力し成長することである。

経済的な問題を最低限クリアするためには収入を得なければならない。開業するまでは生活し開業資金を貯めるために、就職し働かなければならない。就職するためには、雇用主の求める人材である必要がある。

開業後は、患者さんが「また何かあったらここに来たい」と思ってもらうために知識や技術、患者さんの気持ちを理解してあげる心が必要になってくる。

知識や技術を得るため、患者さんの立場になって考えられるようになるためには、やはり自分自身の努力による成長が必要になる。

そして、そのような努力を続けて成長することができれば、自ずと社会的な問題も人格的な問題もクリアできるようになってくるはずだ。

そして、温かみのある家庭も温かみのある接骨院も、どうにかして作るというよりは温かみのある人間になり、確実にコツコツやっていくことで自然と温かみのあるものになっていくのではないだろうか。

温かみのある人間になり夢を叶えるため、知識や技術という面で努力し自分を磨くだけではなく、様々な意味で人と人が触れ合うということを大切に出来るよう、現在の学生という状況を活かし、先生方を良い意味で利用し、様々なことを吸収し、同級生達と協力し競い合い成長し必ず実現したい。夢を現実に変えるために生きているのだから。

私の夢

今、スタートライン

信州医療福祉専門学校
卒業生　赤羽　翔

私の夢は、柔道整復師、はり師、きゅう師として地域の方々に信頼され、そして地域に貢献できるような人間になっていくことです。

私は、そのための一つとして、柔道整復師とはり師、きゅう師の養成学校にダブルスクールという形で3年間過ごしてきました。この3年間は医療に携わる者として最低限の知識となる解剖や生理などを学びました。

高校までの学生生活とは違って専門的な知識を身につけるということで最初のころはなかなか馴染めなくて、苦労が多く何度か嫌になる時もありましたが、自分が目指したことだったので投げ出さずにやりきることができ、この3月に両方合格することが出来ました。それも、良き仲間に出会えたことや良き先生方のおかげだと感謝しています。

さて、試験に合格し柔道整復師、はり師、きゅう師になることが出来ましたが、まだ何も始まっていません。やっと、柔道整復師、はり師、きゅう師としてのスタートラインに立っただけなのです。3年間ずっと勉強ばかりしてきましたが、実際に患者さんの体に触れるということはほとんどしてきていないので、臨床の場での勉強はまた一から始めなくてはいけません。

「名プレイヤーは名監督とは限らない」と学生のころの友人に言われたことがあります。確かにそうだと思います。いくら教科書を読んでの勉強は出来たとしても、一歩臨床の現場に出てしまえば、学生のころに学んだことだけでは通用しないことのほうが多いと思うからです。

先ほども言いましたが、今が本当のスタートです。自分がこれからどんな治療家になっていくのか、社会人としてどんな人間になっていくのかは、これからの考え方や生き方一つで変わってくると思います。

地域社会の中で、柔道整復師、はり師、きゅう師がどうあるべきなのかを考えながら、この仕事に誇りと情熱を持ち続けて、地域の方々に信頼され貢献できるような人間になっていきたいと思います。

柔道整復・はり・きゅう師

3資格同時に合格

長野市の専門学校「信州医療福祉専門学校」を今春卒業した岡市の赤羽翔さん(21)が、柔道整復師、はり師、きゅう師の三資格の国家試験に同時に合格した。三年制の同校の柔道整復学科とはりきゅう学科を掛け持ちで履修した。努力が実り「患者さんに信頼される人になりたい」と喜んでいる。

長野の21歳 開業や教師の夢

上伊那郡辰野町出身。長野高校時代、野球やバスケットボールの部活動などで腰や脚にけがをして接骨院にかかった経験から、柔道整復師を志した。両親らの勧めもあり、はり、きゅう師の資格も取ろうと、午前、午後の二学科で学んだ。二〇〇五年春に新設された同校で、両学科を学んだ一期生は赤羽さんだけだった。

人一倍の勉強が必要だったという。アルバイトはせず、学校のテスト前には「死に物狂いで勉強した」。

二十五日に国家試験の合格者が発表され、同校では柔道整復師は学科全体の九割の三十五人が合格、はり師は二十一人、きゅう師は二十二人が合格した。いずれも養成学校で三年間学ぶのが受験条件で、柔道整復師の試験を行う柔道整復師試験財団(東京)は、三資格の同時取得は「珍しい例ではないか」と話す。

赤羽さんは四月から長野市内の鍼灸・接骨院で働く。「いい仲間や先生に出会えた」と学生生活を振り返りながら、開業や教師の夢も描いている。

柔道整復師とはり・きゅう師の3つの国家試験に合格した赤羽翔さん

▲『信濃毎日新聞』

私の夢

いつまでも笑顔で

北海道柔道整復専門学校
夜間部3年
仲尾　郁弥

私の夢は「いつまでも周りの人たちと笑顔でいられること」です。周りの人というのは家族であり友人であり、そして地域の人たちです。

やはり柔道整復師となるからには開業をしたいという気持ちは当然のようにあります。しかし、私の夢はその先にあるのです。

地域に密着した医療を展開し、地域福祉、地域スポーツとも関わっていければと考えています。つまり、医療や福祉という枠にとらわれず大きな視野を持って地域のために動くことのできるヒト、その地域の中で地域の人たちと笑っていられるようなヒトになりたいのです。

私がなぜこのような夢を持つようになったのかと言いますと、二つの大きな出会いがあります。まずは、福祉の大学を卒業し、老人ホームで介護福祉に携わったこと。ここでは、一人の人間と真正面から向き合い、コミュニケーションをすることの大切さと地域福祉の大切さを学びました。

二つ目は、大学の時に今の学校を紹介してくれた整骨院の先生に出会ったことです。先生の整骨院は地域に深く密着していて患者さんが絶えません。私の理想とする整骨院です。

この二つの出会いが礎となり、私の夢を形づくっています。今の自分にとっては大きすぎる夢かもしれませんが、いつかは現実のものにしたいと考えています。

しかし、「いつまでも」地域の人たちと笑顔でいるためには自分の生活の充実が不可欠であると思います。家族や自分の大切な人、自分がないがしろになるようだと、地域のためにだなんて動けないだろうし、続けることができないでしょう。

この夢がただの夢にならないために、まずは確実な医療技術と知識、対人関係技術を身につけ、そして家族を守る力と生活していく力をつけたいと思います。

この大きな夢をかなえるには長い長い時間がかかるかもしれません。しかし、焦らずに着実に、さまざまな人やモノに触れて、見て、聞いて、自分のものにして一歩一歩成長していきながら夢に向かって進んで行きます。

私の夢

父の背中を見て…

行岡整復専門学校
3年　五反田　望世

私の父は、行岡整復専門学校の第25期（昭和52年）卒業の柔道整復師で、自宅で接骨院を開業しています。小さい頃の私にとっては、自宅と共にある施術所は格好の遊び場の一つで、よく施術所に入り込んでいました。

ベッドの横で父の施術を受けるおばあさんと話し込んだり、牽引機で遊んでおじいさんに怒られたりと、たくさんの患者さんと出逢う機会もありました。

このように、私は仕事をする父の背中と、痛みを抱えて父のもとに集まる患者さんを見て育ちました。

様々な痛みを抱えて来院する患者さんに、いつも優しさと笑顔で真剣に一人一人対応する父は、私にとって、いつも大きく輝いている自慢の父です。

私は高校卒業後、大学に進学し4年間「何が自分に合った仕事なのか」、「何が自分の好きな仕事なのか」を自問自答し続けて来ました。そこで私に柔道整復師の道を選ばせたのは、父のように多くの患者さんの笑顔が見られるような仕事をしたいという想いでした。

私は現在、父の卒業後約20年経った行岡整復専門学校で、かつての父と同じように柔道整復学を学んでいます。整復固定などの実技実習を行い、毎日の講義の中で新しい疑問と発見を繰り返しています。

また、父と同じ職業を目指したことで、今までは曖昧だった柔道整復師としての仕事の重要性も、身を持って感じるようになりました。

現在も父は接骨院での仕事に止まることなく、市民スポーツ大会や、国民体育大会などのボランティア活動にスポーツトレーナーとして参加し、多くの参加者の支援を行うと同時に、後輩の育成や指導も行っています。

また、外務省支援によるモンゴルでの柔道整復術普及事業にも参加し、客員教授としてモンゴル国立健康科学大学と共同活動を行っています。

私は以前から海外の人々の生活、文化、風土に興味があったので、父がモンゴルから帰って来た時に写真を見せてもらい、現地で伝えてきた治療法や騎馬民族であるモンゴル人に多い疾患などの話を聞くことができ、世界の中での柔道整復術というものを身近に感じることができることは、私の楽しみでもあります。

先日、父が私に新たな夢を話してくれました。それは、長期渡航を行う大型船でケガの予防や運動指導、保存療法適用の外傷を扱う常任整復師となることです。

私はその話を聞いた時に笑ってしまいました。どこからも要請を受けていないどころか、柔道整復師がそのような仕事を確立し得るかどうかもわからなかったからです。でも、今は父と同じ常任整復師になることも夢の一つです。

いつか私も父のように、いつも優しさと笑顔を忘れず、社会に貢献できる柔道整復師になり、後に続く人たちが目指してくれるような柔道整復師でいられるよう努力して行きたいと思っています。

私の夢

草原の整骨院

―祖国モンゴルのために―

㈳大阪府柔道整復師会
付属専門学院
柔道整復学科2年生
グルバダム
ムンフズル

留学生の私が自分の夢をみなさんに伝える機会をいただいてとても嬉しいです。日本に来て4年になる私の日本語を大目にみてください。

まずは自己紹介から始めます。

27年前チェコに生まれ、ロシアで育ち、母国モンゴルに初めて帰国したのは9歳の時でした。モンゴルといえば草原ですが、私は普通の都会っ子でした。16歳で高校を卒業し、外国語に興味があったので、日本語科を専攻して大学に進みました。そして4年前いよいよ来日。

最先端の技術の日本に来てその当時モンゴルで流行のウェブデザイナーの勉強をするつもりでした。しかしある日、柔道整復という技術があることを知りました。英語でJUDO THERAPISTというのが気になって調べたら日本の伝統的な治療法で、人間がもっている自然治癒力を生かして怪我を治す方法だと知りました。

柔道は激しいスポーツというイメージしかなかったので、昔は対戦して怪我をしたら素手で治していたということがとてもかっこよく感じました。現代では機械頼りの時代で、多くの人が機械なしで仕事をできないと言っても過言ではないと思います。

どこでもいつでも自分の手2本で技術を使って人を治せる柔道整復師に魅力を感じました。世界でハイテクトップの日本のもう一つ隠れていた世界で、唯一の素晴らしい技術を身に就けることを決意して、日本初の4年制の大阪府柔道整復師会附属専門学院に入学しました。

モンゴルは世界で面積の広さが18位で、人家はまばらです。人口約3百万の半分以上が20～30歳代の若い国です。残念ながら医療のレベルがとても低いです。医療機関が少なく、医療人材も不足しています。特に田舎の方では病院までの距離が、車で2～3日かかる人が多く、適切な治療を受けられない状態です。落馬する子供や怪我をしてほおっておいても治ると思い込んだため変形が残る人も珍しくありません。

個人病院より安いので数少ない国立病院を選ぶ市民がほとんどです。しかし患者が多すぎて治療どころか診断すら出来ません。全国で医者7千人の内、整形外科の医者は人口10万人当たり3人しかいない母国で、私自身も不安で怖いです。もちろん整骨院はありません。だから私はモンゴルの医療を少しでも助けたい、治療を受けられない患者さんの力になりたいです。

私の夢はモンゴルで整骨院を開院することです。あきらめてはいけない、モンゴルの人びとの期待を背負った大事な夢です。

JUDO THERAPISTは日本だけではもったいないので世界に広めて多くの人びとに知っていただきたいです。

もし何年か後にモンゴルへ行かれる機会があったら私の夢を思い出してください。そして私の夢が実現されていることを確かめて下さい。

▶モンゴルでの少年時代

私の夢

地域の人たちを支えたい！

福岡柔道整復専門学校
3年　安達 志保美

私の夢は、接骨院を開業し、地域の人たちを支えて行けるような柔道整復師になることです。

私は、小さい頃からスポーツが大好きで、中、高、大学と部活動を続けてきました。その長い競技生活の中で学んだものはとても大きかったのではないかと思います。

友達や家族の大切さ、人に感謝する気持ちなど、普通のことなのかもしれませんが、それが本当に大切だと感じることが多かったように思います。

そして、競技をやめた今でもそれは同じです。大学を卒業してもなお、勉強したいと専門学校への進学を話した時、初めは反対したものの、最後には認めてくれて、応援すると言ってくれた家族にはとても感謝しています。それと同時に、私自身も頑張っていかなければと思い、この3年間過ごしてきました。

学校での勉強は、専門的な知識を学んで行くということで、大変なことも多いですが、学ぶことの楽しさもまた実感しています。

柔道整復師の魅力は、自分自身で判断し治療ができることではないかと私は思っています。その分、自分自身の行動などに対しても責任感を持たなければいけません。

今はまだ学校での勉強ばかりで、臨床現場での実践というのはほとんどありません。まだまだこれからも学ばなければいけないことはたくさんあると思うので、いろんなことを経験し、学んでいけたらと思います。

最近、テレビや新聞などで医療現場での問題がとりあげられているのをよく目にします。

しかし、多くの問題をかかえながらも医療は進歩し続けてきています。

私もこれから医療現場に携わっていく者として日々成長し、地域の人たちを支えていけるような柔道整復師になりたいと思います。